

ミステリ読書案内

2022. 6. 1 発行元

第361号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

自動車とミステリ

現在のミステリで「自動車」が登場しないということはめったにない。どこにでも必ず存在するもののひとつである。そんな「自動車」についてちょっとだけ取り上げてみたくなった。ミステリの中では……。

自動車なしでは暮らせない

私のように地方の山の中に住んでいると、車なしには生活は成り立たない。仕事をしていた時には毎日の通勤の脚であり、休日に家族で出掛ける時にはどうしても必要なものだった。鉄道やバスは今では本数が極端に少なくなり、めったに利用しないものになっている。

幸い免許取得以来一度も違反や事故はなく、警察のお世話になったことはない。元々運転には自信がない方で、いつも「運転は怖いなあ」と思っていることが、安全運転に繋がってきたのだと思う。公務員(教員)だったので、酒酔い運転なんてもってのほか。

今も大都市に車で行くことはない。高速道路も確実に空いているところだけ。車線の数が増えると、とたんに恐怖を感じる。

探偵と自動車の関係

シャーロック・ホームズが自動車に乗る描写は後期の作品の一場面ぐらいしかない。そういう時代だった。エラリー・クイーンはスピード狂で、1924年製のデューセンバ

ーグが愛車。アメリカならではか？山道などを凄い勢いで上っていく。でも多くの名探偵は都市に住んでいるので、自動車の運転そのものはあまり印象に残っていない。イエローキャブなどのタクシー利用はよく目にした気がする。

日本の名探偵はどうか。ソアラに乗って颯爽と全国に出掛けていくのは内田康夫作品の浅見光彦か。「そんなに遠くまで…」と思う作品が多かった。名探偵というわけではないが、東名高速道路、中央自動車道、名神高速道路などを使ってのアリバイ・トリックもミステリの中で

ではよく登場していた気がする。

「レンタカー」を活用する話も展開の中ではよく出てくる。目立たない車「白のカラーラ」か……。

パトカーなどの警察車両

パトカーはミステリには欠かせないものである。容疑者の監視・尾行、誘拐事件での追跡劇、犯罪組織に対処するための包囲網作戦……。赤色灯とサイレン。ずいぶんいろいろな場面を読んできたと思う。

日常生活でよく見かけるのは交番のミニパト。警察車両の車としての特徴がミステリの根幹部分に生かされている例はパッと思いつかない。(中には機関砲などで武装しているパトカーが登場する作品もあるけれども…)むしろ白バイ隊や TOKAGE 隊などの方がストーリーに生かされている気がする。カーチェイスも舞台によっては楽しめることも多い。

香納諒一 『さすらいのキャンパー探偵』シリーズ

双葉文庫から『降らなきや晴れ』『水平線がきらつきらっ』『見知らぬ町で』と3冊出ている。2017年頃にWebマガジンや『小説推理』に連載したものを文庫に収めたもの。主人公の辰巳翔一は廃墟撮影などのカメラマン、フリーライターの仕事をしながら全国を回る。愛車はフォルクスワーゲン・タイプ2(通称ワーゲンバス)。車体に「辰巳探偵事務所」表示が書かれている。調査の依頼を受けたり、たまたまの事件に巻き込まれたりという展開になっている。ワーゲンバスはキャンピングカーとしての作りになっていて、テーブルやベッドなどが設置されている。夕方、宿泊可能な駐車場に止めると、椅子を車の傍に下ろしてビールを一杯という形になる。食事を作ることもあるが、近場に出掛ける場面の方が多い。車が物語の中での重要な役割をはたしているという好例である。

広瀬正 『T型フォード殺人事件』

こちらはかなり古い。1972年講談社。ところがこの1972年は作者・広瀬正が突然亡くなった年で、死後の刊行ということになってしまった。私の手元にあるのは1977年の河出書房新社の『広瀬正・小説全集5』という函入りの本で(「月報」付き)、古書市場では1000円程度で売られているようである。

「T型フォード」というのはクラシックカーだと思ってもらってよい。1908年ヘンリー・フォードが中心になって開発した大衆車。「T型フォード」を超える販売台数に達したのは後のフォルクスワーゲン・ビートルだけしかなく、「T型フォード」は20世紀前半のアメリカ社会になくてはならない自動車だった。本書に登場してくるのは1924年製で、当時この車の中で起きた密室殺人事件の真相を探る推理ゲームの最中に1970年の現在でも殺人事件が起こるといふ流れ。「本格探偵小説」としての謎解きをメインに据えた有名な作品。今は集英社文庫版が手に入りやすいか。